

山田 金次郎（やまだ・きんじろう）

1、プロフィール

言論人。大正 15 年から昭和 20 年までの 21 年間の長きにわたって「東奥日報社」社長として活躍する。新聞社の経営基盤の確立にその手腕を発揮し（東奥日報中興の祖）と称された。

<生没>

1885(明治 18)年 11 月 3 日 ~ 1956(昭和 31)年 1 月 25 日

<代表作>

月刊雑誌「八甲田山」(昭和 21 年 12 月に創刊。単独経営で、第 7 号まで刊行する。)

<青森との関わり>

東津軽郡青森町(現青森市)に生まれる。明治 38 年東奥日報社に入社。以後、終戦後の追放以外は東奥日報社と歩を一にする。

2、作家解説

1885(明治 18)年 11 月 3 日、東津軽郡青森町米町 33 番戸に生まれる。25 年、新町尋常小学校に入学する。読書好きで勤勉家であったゆえに「二宮金次郎」と綽名されたという。小学校入学前に父死亡。兄弟 3 人、姉妹 3 人を抱え、一家は苦難の道を歩むことになる。小学校卒業後、東津軽郡役所に勤める。青森郵便電信局の通信事務員を経て、38 年 11 月、東奥日報社の帯紙係として入社。主筆の和田勝衛、編集長の木村横斜らの激励を受ける。

40 年、メソヂスト青森教会での本田庸一の講演に感銘を受け、「本田氏の米国漫遊談」の題で記事にする。これを機に司法記者として出発する。41 年、現職の青森警察署長と次席らの疑獄事件をスクープし、全国的に注目される。さらに同年、青森監獄の黒木典獄の囚人虐待事件を徹底追求し、「人道の敵」ときめつけ

た。後年、山田は「私は殺されていたかも知れない」と当時の緊迫した状況を振り返っている。

大正2年、尾崎行雄が弘前公園で講演する。それを報道した記事が他紙を圧倒し、「東奥日報に山田金次郎あり」とその名を県下に知らしめたという。3年、一念発起し、早稲田大学に休職扱いで学ぶ。勉学に勤しむかたわら、県出身の多くの先達に会う。5年に卒業と同時に復職。15年、取締役社長に推挙される。主筆を兼任する。

以後、21年間社長として会社の経営基盤の確立に尽力したばかりではなく、各方面に多彩な業績を残した。わけでも、昭和3年の創立40周年には「東奥年鑑」「青森県総覧」を刊行し、県民の賞賛を得た。また、水稻増収競技会、青森県相撲大会など、県民に親しまれた事業を行った。

終戦後、公職追放を受け、26年の取り消しまで東奥日報社と関係を断つ。この間、月刊雑誌「八甲田山」を第7号まで発行する。

昭和31年1月25日永眠。享年70歳。

3、資料紹介

○『山田金次郎小伝』

図書

1961(昭和36)年11月8日

216mm×147mm

山田金次郎の生涯を四部構成で辿る評伝。一部は〈足跡〉。誕生から葬儀まで。二部は〈社長山田金次郎を語る〉。三部は〈追憶〉。秋田雨雀をはじめ21名が偲んでいる。四部は〈遺稿〉を集めている。山田金次郎の人となりを知るうえでは不可欠の、第一級の資料といえよう。